

<第3回>Bechstein Klavier Schule 講師向けレッスンセミナー



2019年2月17日(日)、汐留ベヒシュタイン・サロンにて Bechstein Klavier Schule 講師向けレッスンセミナーの最終回である第3回目を開催いたしました。

今回は内藤晃先生と石本育子先生による公開レッスンの形式を取り、第1回・第2回で提唱したコンセプトを実際にどうレッスンに活かしているのかみていきました。

まず一人目は実際にたかまつ楽器青い鳥音楽教室マスタークラスで学んでいる現在小学2年生のMさんのレッスンです。まずMさんの演奏を聴いてみましょうとのことで、シューマンのアラバスクを披露してくださいました。のびのびとした、

素敵な演奏にスタッフや聴講されている方は驚き、その音楽に感動しました。

Allegro moderato.

№22.

演奏が終わった後、いよいよレッスンに移ります。受講曲は、ハイドン：ソナタ Hob.XVI：20 ハ短調 第1楽章。この曲はまだ取り組み始めたばかりだそうです内藤先生はまず、ハイドンは音楽の組み立てが大事と話されました。「私は昨日、飛行機に乗って東京に来ました」といった文章の様に単語ごとに区切るように、スラーやアーティキュレーションを細かくみていきました。単語をフレーズやリズムとしてみていき、小学2年生でもわかりやすく、噛み砕いて例えを出されていたのが印象的でした。例え自体は子どもに合わせた噛み砕いたものであっても、指導していることは非常にレベルが高く、

こういったことがMさんをはじめマスタークラスの生徒さんの音楽性や意識を高められるところなのでは、と感じました。先生はたくさんMさんに質問し、Mさんもそれに答えていました。レッスンの中では作曲家のエピソードもお話され、ハイドンは人を驚かせることが好きで交響曲「驚愕」という作品を作っていること、フレーズの切り替えがとても明確なことが特徴の一つだと話しておられました。こうしてピアノテクニックだけではなく、知識もレッスンの中で話し伝えることで生徒もただ弾くのではなく、考えて演奏することができると感じました。

レッスンの締めくくりで、弾けるようになってから表現をつけるのではなく、指導していく時にまず頭の中に明確なヴィジョン(表現)を作っておけることが大事だと石本先生は述べました。お子さんとしてではなく一人のピアニストとして、視線を合わせてピアノレッスンが受けられることも演奏へのモチベーションにつながるのではないかと思います。

2人目は小学3年生のNさんです。曲はエルメンライヒの紡ぎ歌とギロックの月の光です。

月の光ではまずペダリングについて指導されました。ピアノの譜面台を取って内部のダンパーペダルの仕組みを見せながらコツを指導されました。ダンパーペダルはある程度踏んだところから音に変化がでるので、上から踏んだり、踏みかえたりの際に足を離すのはとても無駄なことだと話されました。ペダル踏みかえのところで何度も弾かせ、良い音の出し方を自ら見つけ、覚えてもらえるように指導されました。

紡ぎ歌でもピアノの構造を見せ、説明しながら細かいパッセージのコツを教えていかれました。また中間部の左手がメロディーになる部分では内藤先生が指揮をして、Nさんを導いておられました。石本先生によるフレーズの歌い方、声楽科出身ならではの指導で実際にNさんに歌ってもらい、

フレーズをどう歌わせたいか、確認する場面もありました。その後弾いてみたところ、そのフレーズを感じて、音が最初と変わっていて、会場の皆さんもとても驚かれていました。

楽譜は音楽に残す為に記号化したものなので描き切れていないことをどれだけ読み取れるかが大事だとNさんに伝えていらっしかったです。

考えさせることが大事で、Yさんもレッスンの中で悩み、考えて弾くことで大きく変わることが出来たのだと思います。

最後の3人目はYさんで、曲はショパンの前奏曲Op.28-4 ホ短調です。

このレッスンに向け、先生が曲を選んで練習してもらったとのことですが、選曲理由として、メロディーは同じ辺りを行ったりきたりするが、左手の和音の移り変わりが激しく、和音の響きを聴き取り演奏に反映させるのにはうってつけだから、だそうです。この曲はノアンコンクールでも課題曲にあ

げられるように、左手の和声の動きに右手のシンプルなメロディーがつけられており、音符を追って弾くことは簡単にみえますが、音楽的に非常に難しいので、この曲を課題として出されるのはとてもハードルが高いのではと思ってしまいましたが、レッスンはどのように進んでいったのでしょうか。

変化する和音に対して、どのようなアプローチをすべきかを重点にレッスンが進みました。練習を始めたばかりなので、まだ左手の和声やメロディーに対して、理解が追いついていませんでした。2人目のNさんと同じく、内藤先生が音楽の呼吸に合わせて指揮を振ってYさんを導いたりもしていましたが、やはりYさんに一番響いたようにみえたのは先生がお手本の演奏をYさんに聴かせたことです。演奏を聴いた後、イメージーションが膨らんだのか、その後の演奏では先生のように弾いてみたいという意欲やこう表現したいという意識がにじみ始めていました。第2回のセミナーで、先生は感動させる見本を生徒に示すべきと話していた通り、モチベーションが上がった様子を聴講者の皆さんが感じる事が出来たと思います。少しずつではありましたが、Yさんの音楽が変わっていくのを目のあたりにしたことで先生が音楽に感動して奏する姿に共感し、自分もこう演奏したいという気持ちが出てきたのではないのでしょうか。自分も少し異なりますが、好きなピアニストの演奏を聴き、曲やその音楽に感動して自分もこんな演奏を目指したいと思ったことが何度もあります。その体験を自分の先生でできることは非常に素晴らしいことではないでしょうか。

全てのレッスンを聴講して、3人の生徒さんとも性格や音楽性などが異なりましたが、決して「ダメ」、「弾けてない」などのネガティブな言葉を言わず、どのように弾きたいか、ということを開きかけ答えを引き出し、分からない時は様々な視点からヒントを出していくのが非常に印象的でした。非常にリラックスした状態で指導を受けたことは生徒さん達の心にしっかりと刻まれ、そしてその姿を見て聴いた私達も今後レッスンをしていくにあたり、常に全3回のセミナーを通して教えられたこと、見たこと聴いたことを頭に留めておきたいと強く思いました。

(文責：泰田)